

ヒトエグナ養殖試験

1. 趣 旨

前年度よりの継続事業で今回は可能適採回数に重点を於いて計画実施した。

2. 設 置

前年度同様具志川村荒川に設置した。施設ヒビ数6張で此の中、竹ヒビは2組を1組に連結し、ヒビ毎にAからEまでの記号を付した。各ヒビの施設状況は下表の通り。

ヒビ別	枚数	杭1列の長さ	ヒビ		川底よりヒビの高さ	干出時間	備考
			長さ	巾			
A(藻場型)	16枚	12.40 ^m	180 ^m	1.20 ^m	60cm	4時間	
B(棕櫚場型)	22	19	168	1.75	15	4時間	
C()	20	18	168	1.75	0	2時間	
D(山原竹用竹組)	20	24	24	山原竹の長さ	50	3時間	
E(藻場型)	10	14.30	143	1	13	4時間	

杭建込は1957年10月²2日~23日、ヒビ張込は1957年10月26日(日9月4日)と一斉にした。竹ヒビは山原竹を二つ割にし割面上に向け、2分径棕櫚縄で編んだ

3. 摘 採

回数	月日	摘採方法	計量法	A	B	C	D	E	計	備考
I	1958 1. 9	干出時に しり取り	水高同部 129日計 量	5斤- 228枚	1斤- 886枚	-	1斤- 1066枚	1斤- 1042枚	10斤- 1.9斤	Dヒビは半ヒビ分 収納した。
II	1. 24	*	*	6- 537	-	-	-	-	6- 537	Bヒビは川岸側に あり、余り流れの 影響を受けない。
III	2. 24	*	*	11- 72	-	-	-	-	11-72	Bヒビは2月6日 ~7日の豪雨によ り流失、各ヒビ共 地裡し為害を欠き 存活及養芥多く植 色中のヒトエグナ 多し。
IV	2. 28	*	*	-	13- 156	7-36	-	-	20- 536	
V	4. 28	*	*	6- 15	-	-	19- 1029	-	25- 1175	
計				29- 34	14- 1054	7-36	21- 481	1- 1042	73- 1372	

考 察

- 第1回摘採時に於いて各ヒビ毎の収量を比較して見ると、矢張り本年も藻ヒビAの方が収量が多い。藻ヒビBは川岸側にあり、比処は余り流れの影響を受けない為か植苗の着成が比較的少なく成長は良いが収量は少なかった。竹ヒビDは植苗着成は極めて多いが、干出中乾燥が早い事と伴って成長率は遅く藻ヒビAの約 $\frac{1}{3}$ の収量であった。棕櫚ヒビBも竹ヒビと略同量で棕櫚

ヒビも乾燥が早いと思われるので現在の2分経では不向と思われる。粽
穂ヒビには干出時間短き為か着生少く収納出来なかつた。

2 第2回、3回の摘採は時間予知がなく穂ヒビA分の収納しか出来なかつた。4回5回も同様で全般に亘る収納は出来なかつた。

3 穂ヒビAの摘採毎の比較を見ると、初回摘採より15日目に摘採した場合
初回分よりも多く収納している。5回摘採した時は2回目より1月後に摘採
したが約2倍の収納となつている。

これから見ると15日毎に充分摘採出来らものである。

4 各ヒビ毎の収量計を見るに穂ヒビAが最も多く且摘採回数も多い。之は
15日毎に摘採出来る事と、穂ヒビが養殖には最も良いと言う事を示すもの
であると思われる。竹ヒビDも収量から見て結果的に良いが、種苗の着生
数を少くし、今回よりも養分程度をもたせたら良いと思われる。粽穂ヒビC
は乾燥度が早くヒトエグサの伸長が遅れるものと思われたので干出時間を
短くしたためヒビDの着生が多く此の為にヒトエグサの収納は少なかつた。

ヒトエグサ 保蔵調査

1 理 旨

生産者の摘採より製造まで一時保蔵中の重量減少度状況を知るため実施して
見た。

2 詳 度

良好にし、芳香あり。

3 供 試 品

第1回摘採分のヒトエグサ

4 方法及期間

摘採後水洗し掘り絞り、ヒイコ中で水切りし自然乾燥をなす。1968年1
月9日より16日まで8日間

5 結 果